

# 僕のヒーローアカデミア Thunder Story

時空 雄護

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕のヒーローアカデミアの二次創作です。

緑谷不在の、上鳴 電気が主人公の物語です。

※本小説では、多種多様のネタ、パロディがあります。さらに言えばキャラ崩壊、性格改変に設定変更があります。

それでも「出来てるよ……。」な人はどうぞ！

## 目次

プロローグ&上鳴 電気・オリジン	1
二つの大きな運命	5
真実と継承する二つの光	9
異世界からの来人、そして・・・	19
特訓開始 く引き出しがありすぎる出久く	26
雄・英・入・試／hになるために	35
結果と報告と共有と	43
なぜ俺達はヒーローになりたいのか	48
個性把握テスト／Aの思惑	51
個性の Introduction	56
開始！戦闘訓練【前編】	59
皆さんに報告したいことがあります	65

## プロローグ&上鳴 電気・オリジン

上鳴かみなり 電気でんき・・・彼は個性「帯電」というものであるが、ある事件をきっかけにワン・フォー・オールを受け継ぐことになった。

ある公園において・・・

「行くよ・・・上鳴！」

「はああああああ!!」

威勢のいい声と共に少女が少年「上鳴 電気」に向かって突撃する。それを軽くないしながら上鳴が瞬間的に足に雷を纏い、後ろへ回り雷の剣を作り、首に当てる。

「はあ・・・また負けた。」

「いや、軽くないなしてたけど十分だからな？これも使っちゃったし。」  
そう言いながら腕に雷を纏わせる上鳴。

「それってHUNTER×HUNTERのキアラの技でしょ？」

「ん？何言ってるんだ？響香？」

「ん？・・・変な電波受信してたみたい。」

「はい？まあ気にしなくていいか。」

なぜか世界を超えた電波を受信したようだが、些細なことである。

プレゼント・マイク「ここで説明しよう！上鳴電気の個性、『帯電』は本来周りに散らしたり相手に直に流すのみだったが、彼の努力により身体に纏わせ攻撃、防御、移動にと使用することが出来るようになったのだ！もう『ライジン』で良いと思うよ！俺は！」

「ん？今説明されたような・・・。」  
「まあ、気にしないで置くか。」

上鳴電気とは一体どんな少年なのか。

父「息子はなあ、簡単に言えば器用貧乏といった所か。多方面に手を出していながら恋人にも気を使っているのが良い例だな。早く紹介してほしいよ。」

響香「うちにとっては、幼馴染だけど守ってくれるボディガード兼恋人・・・かな？／＼／＼最近胸も大きくなってきてるし・・・。」

友達「上鳴は周りを見ながら手を差し出すやつだな。成績も優秀だし運動も抜群。ああいうのが才能マンって事だよ。」

そんな彼のオリジンとはなんなのか・・・。

彼は生まれついでての天才であった。

彼の個性である『帯電』はそこまで強力なものではなかったが、個性を把握するのに時間はかからなかった。

「イメージだイメージ・・・体に流れる血液のように・・・！」  
バチツ！

「駄目だ！もっとイメージを強くするんだ・・・！」

「電気、お隣さんの耳朗さんだ。あいさつしろよ？」

「耳朗響徳です。この娘は響香。」

「よ、よろしくお願いします。」

「よろしく。俺は電気だ。」

「オールマイト・・・！」

『何故かって？私が来たあ！』

彼は数年で成長し、強くなった。

彼らにあってからがさらに成長を加速させたのだった・・・。

??? 『どうする・・・このままでは私は消えてしまい、宇宙にまた危険が起きる・・・。』

??? 『仕方がない。地球に行き、誰かに憑依させてもらおう。』

彼の目覚めは、まだ遠い・・・。

## 二つの大きな運命

隣町まで買い物兼デートをしていた上鳴と響香。  
そんな彼に、二つの運命が起きるのであった。

・  
・  
・

### 三人称視点

「ふいふ、隣町まで出掛けた甲斐あったな。」

「うん、楽しかった♪」ムギユ（胸の谷間に右腕を入れる。）

（（砂糖吐きそう））

自然の内にイチヤイチャして周りを砂糖まみれにする二人だが、  
ドガアアアアアアン!!

「!?!」

突然の爆発音に周りも含めて驚くが、

「行くぞ！嫌な予感がする！」

「うん！」

「ちよ、君たち！」

嫌な予感がした二人が爆発音がした方へ行くのを観た一人の男性  
が、止めるが聞いていないのか二人はそのまま行ってしまった。

『・・・!』

何者かは何かに気づき、驚く。

『まさか・・・こんなところまで彼らがいるとは・・・。』

何者かが見る先には、耳たぶにプラグがある少女と共に走る金髪の  
少年がいた。

『デュナミスト・・・私はまた、共にいられるのか・・・。』

爆発音が聞こえて来た方向へ向かっていると、また爆発音が聞こえ



る。

「また！」

「まさか強個性のやつが操られてるのか!？」

走りながら話していると、現場に着いたのか周りに野次馬がいた。

「おいおい、あの子供どんな個性だよ？周りが燃えてるぞ！」

「消火だ！消火機持って来い！」

周りがうるさくなる中、紫色の敵が叫ぶ。

「最高だ！君は俺のヒーローだ！」

「くっ……くそがあ……!？」

「……！」

敵を見て何かを考える二人だが、

「……！危ねえ！」

爆破の影響で飛んできた破片から小学二年らしき子供を助ける上  
鳴。

「あ、ありがとうお兄ちゃん！」

「どういたしまして。ヒーローの方に行つとけ。」

「うん！」

子供を逃して、一泊。

「行くか！」

そう言つてヘドロ男（勝手に命名）に向かう上鳴。

勿論プロヒーローに止められそうになるが

「君！何をして「邪魔！」ちよ、嘘ーん……。」ガックシ

響香に邪魔と言われ、言われながらもどいてあげるが何故か一瞬顔  
が某自称天才物理学者の顔になったのはご愛嬌と言うべきか。

「どうするの!？」

「ヘドロの動きを止めて堅気顔のやつ助ける！OK!？」

「OK！」

出来るだけ簡潔に説明してわかる二人。

そのままヘドロ男に向かって進む二人を、一人の男が見つける。

（情けない……彼らが危険を晒す必要はないはずだ！）

そう嘆きながらも疑問を持つ。

(何故か彼からワン・フォー・オールと似た光を感じる・・・何だこれは?)

数分前・・・

『すまない、少年・・・君に憑依させてもらう。』

実は少し前、ある者が上鳴へ憑依していたのだ。

その者を正体とは、

宇宙を守る光の巨人、その中でも随一の力を持ち、別次元の地球を守った巨人

ウルトラマンの神と言われた『ウルトラマンノア』であった。

そんなことには気づかず、右手に雷を集めると、おもむろにヘドロ男に向けて発射。

それにヘドロ男は気づいたが遅く、攻撃を受けさらにその際に堅気顔の少年、「爆豪 勝己」が脱出する。

「何で助けた！俺だけでm「いいからさっさと動く！」!?くそが・・・！」

爆豪が叫ぶが響香に怒られ渋々動くが何故か上鳴が気になるようだ。ちらちらと見ている。

(あいつから変な感じしたな・・・何だありやあ・・・?)

どうやら爆豪も感じ取れるようだ。

「情けないな！少年に助けられるとは！」

その瞬間、オールマイトが現れた。

「オールマイト・・・！」

静かに、だが嬉しく驚く上鳴。ついでに爆豪も驚いていた。

「オールマイト・・・!?!」

「TEXTS SMASH！」

その攻撃はヴィランを吹き飛ばすだけでなく、上昇気流を起こし火

を全て消し去った。

「帰るか……。」

そう呟き、帰ろうとする上鳴と耳朗。だがプロヒーローがそれを遮る。

「君達！何故あんな危険なk「あんたらがそれを言うなよ。」……！」

注意をしようとヒーローが声をかけるが、あっさり遮られる。

「ヒーローは自己犠牲、そして人をたすけてこそだろ。俺達はそれをしただけだ。」

そう言つて二人が去つた後、オールマイトは二人を追いかけようとする。

その後ろに少年がいたことを知らず、その少年も追いかけたことを……。

## 真実と継承する二つの光

へドロ事件の現場から数分の通りにて・・・

「もう・・・いきなりへドロに向かうからびっくりしたよ。」

「ごめんごめん、やっぱりヒーローは人助けだから。」

「うん、上鳴はやっぱ優しいね♪」ムニユ

(こ、こいつ・・・あざとくなってる!?) ↑自分のせい

コント?をしている二人の元に一人の男が来る。

金髪であり、とてもだが食事を取っているのかと思うほど痩せ細く  
なっている。

「すまない。君達に話があるのだが・・・。」

「?いいですけど。」

そう答えると早速切り出す。

「先ほどの事件、実はその前にオールマイトがへドロ男を捕まえよう  
としたら取り逃がしてしまっただね・・・おっと、私はこういう者でし  
て・・・。」

そういうと名刺を取り出し二人に差し出す

「えっと・・・八木 俊典さん?」

「所属は・・・マイツプロ!」

オールマイトが所属している事務所だったのか、二人ともびっくり  
している。

「続き、いいかね?」

「どうぞ。」

「んん、だが一人の少年が捕まり、君達が助けたから事件はすぐに静  
まった。・・・君達に聞きたい。」

「君達にとって、ヒーローとは何だ?」

その問いに二人は一瞬悩むが・・・

「ヒーローってのは自己犠牲を元に生まれてきました。」

「上鳴・・・?」

「ほう・・・?」

上鳴の答えに感心する俊典。

「ヒーローにとって金利、名誉は必要ない。」

「たとえばそれが目的であるならヒーローじゃない。」

「ヒーローは自己犠牲であり、且つ自分の意思で決めるべきだ。」  
「……………」

「?!」

なにやら俊典が悩んでいたが……

「まさかここまでとはな……。正直すごいよ、君は！」ムキムキ……  
!

「ま、マジかよ……！」

「う、嘘……！」

「オールマイトオ!?」

「ハッハッハッハッハッハッハッハッ！驚いたかね！少年少女たち！」

まさかのオールマイトに二人とも驚くが、

カラン……

「!?!」

静かな通りに缶の音がなり、鳴った方向を抜き三人とも臨戦態勢をとるが、そこから出てきたのは……

「やべえ、まさか今のがオールマイトだって……!?!」

「あれ？お前さつきヘドロ男に捕まってた……」

「爆豪。爆豪 勝己だ。」

先ほどのときに上鳴が助けた少年がいた。

「ま、まさか今のを……」

「見ちまったよオールマイト……どうということなんだ……!?!」

質問する爆豪だが……

「すまない、そのことは明日言わせて貰う。明日ここに来てほしい。」

そう言うオールマイトは携帯を開き、ある場所を指定する。

「ここって……」

「たしか海岸だけど……?」

「そこって確かあゴミだらけだったような……」

「その通りだ。さて諸君、君達には選択肢がある。」

一つはこのことを忘れてそのままの毎日を過ごす。

一つはここにきて私の秘密を知ることだ。

君達はどれを選ぶ？

」

次の日・・・

「来ましたよオールライト・・・。」

「どういふことかさつきと話しやがれえ・・・！」ボンボンボン・・・  
！

「あんたは落ち着きなよ。手から爆発音鳴ってる。」ミミフサギ

「ハツハツハツハツハ！やはり来たか！」

三人が揃うとこんな話をした。

話を要約すると

・以前にあるヴェランと戦った際に大きな怪我をあい、活動期間が3時間までになってしまった。

・そうなつてしまい、ある事情により後継者を探していたこと。

「私の個性はただの個性ではない。」

「聖火のごとく受け継がれた個性！」

「その名もワン・フオー・オール！一人は皆のために！」

「数々のヒーローがこの個性を受け継いで来た！」

そしてオールライトは上鳴を指差す。

「次は・・・君だ!!上鳴少年！」

「そーいや一つ思ってたんだがよ・・・。上鳴。」

突然爆豪が言い出す。

「ん？どうした？」

何も覚えがない上鳴だが

「む、私も上鳴少年に聞きたいことがあるんだ……。」

「え？二人も？私も聞きたいことある。」

「み、皆揃いも揃って何聞きたいんだよ？」

代表してかオールマイトが言う。

「君の中からワン・フォー・オールに似た光を感じるんだ。それは一体何だい？」

「……え？」

覚えがないのか、少し困惑する上鳴。すると

(すまない少年、勝手にだがその体に憑依していた。)

「!!?!」

4人の頭の中にテレパシーのように声が響く。

「おいおいマジかよ……。」

「うそーん……予感が当たっちゃったよ。」

「何で頭ん中に声が聞こえるんだよ!」

「えつとどちら様ですか？」

四人それぞれの反応をしてしまう。

そりやそうだよね！いきなり頭の中に声が聞こえるなんて！（うp  
主）

（ん、とにかく私の話をさせてもらおう。少年、目の前にあるエボルト  
ラスターを空に翳してくれ。）

「え、エボルトラスターってこれのことか。」

突然翳してくれと言われても思ったようだが目と鼻の先にそれ  
らしきものがあつたので空に翳す。

するとエボルトラスターから銀色の光が溢れ、4人をどこかに転移  
させるようだ。

「!」う、うおおおおおおお!」

そのまま四人は光と共に一度消えた。

## 光の空間

四人が目を覚ますとそこは金色の空が見える場所だった。すると目線で2 m先に光が集まり、光が消えた後には……

銀色の巨人がいた。

「で、でけえ……。」

「これが、光の正体……。」

「なんか、神々しい。」

「なんだろう……昔夢で見たことあるような……。」

『夢でこの姿を見たのだな?』

四人ともそれぞれの反応をしていると、巨人が上鳴に語りかける。

「あ、ああうん。まあうる覚えではつきりしてないけど……。」

『そうであるならば、やはり君はデユナミストなのだな。』

「「「デユナミスト?」」」

唐突に出てきた単語に四人とも疑問をもつ。

『簡単に言えば、私の力を、む。』

「?どうしたんだよ?」

『そう言えば名前をまだ言っってなかったな。』

『私の名は……』

ウルトラマンノアだ。』

「ウルトラマン……ノア?」

『そうだ。』

もう一度繰り返す上鳴に肯定する。

「しかし何故上鳴少年を選んだ?その。デユナミストとやらも気になる。」



オールマイトがそう疑問をもつと、

『うむ、デユナミストは簡単に言えば私の力を使うことが出来る人間のことをそう呼ぶ。』

『しかしデユナミストはそう簡単にはいないのだ。』

『デユナミストのなる条件もわからない。』

『しかし私はデユナミストを感知できる。この地球で感知したのは上鳴少年だけだったが。』

そう締めくくると、思い出したかのように何かを言う。

『それと、本来ならデユナミストは戦い続けると細胞にアポトーシスという現象が起き、死んでしまう。』

「!!」「!!」

それを聞き一瞬にして緊迫した空気になったが  
『心配するな、すでにその異常はなくしてある。』

「!!」「ほっ……。」「!!」

ほっとする四人。

「しっかしよお……。」チラ

「ん??」

こちらを見てきた爆豪。

「あんた、一体どこから来たんだよ?」

『……。』

一瞬だけが言いたくないようか雰囲気醸し出したノアだが、

『うむ、正直に言えばだが……私は別次元の宇宙から来たのだ。』

さらっと言ったがとんでもないことである。

「!!」「……。」「はいいい!!」「!!」

うん、そりやびつくりするよね! (うp主)

「は?は?は?はあああああ!!?」

「んんん、頭が痛いよ……。キyun」ボタン

「耳朗少女が気絶したあ!!いや、今触れるとここではない!!」

「おおおお落ちて俺ええ!素数を数えるんだ!えーと、13571

11331719233293133741434749……。」「

『こ、これは予想以上に悲惨だな……。』

数分後・・・

「『落ち着いた。』」

『そ、そうか。いきなりすまなかつたな、急に別世界から来たなど、信じてはくれないだろうと括っていたのだが・・・。』

「んまあ常識外なことは把握した。でも別世界って本当にあったのか・・・。」

「実際研究では平行世界が多々あるとは聞いていたとはいえ、まさか本当にあったとはな・・・。」

「・・・。」

上鳴とオールマイトが正常になっていたが、響香と爆豪はまだ完全に処理できてないようだ。

「しかし、どうやってここまで来たのだ？」

当然の質問にノアは

『うむ、実はな・・・。』

話を要約すればこうなる。

・様々な世界を回り、スペースビースト（ノアの専門らしい）や他の怪獣（こちらは他のウルトラマンも対応しているらしい）を退治していた。

・ある時に敵と戦った際に力を使いすぎてしまい、満足に動けなくなってしまう。

・その際に偶然にもこの世界の地球に辿り着きに、さらにデユナミストである上鳴を見つけ、そのまま憑依した。

このようなことで上鳴に憑依したようだ。

『む、流石に時間が立ち過ぎている。現実世界で言えばそろそろ学校へ行く時間だ。』

「『あ、今日土曜だから休み』」

「土曜日はあまり活動していないのでな・・・気にしなくていいぞ。『それでもものだがな・・・上鳴、もう一度エボルト「ちよっと待ってくれ。」・・・ん？誰だ？』」

突然女性の声が聞こえ、その方向へ向くと、八人の人がいた。

二人ははつきり視認できるが、残りが影のよう真っ黒で誰か性別すらわからない。

しかも見える二人のうち一人は女性であり一人は男で痩せ細っている、さらにオールマイトがその人を見て驚いている。

「あ、あ、あなたは……!!?」

「久しぶりだね。俊典。」

「オールマイト、そのアマは知り合いかあ?」

「あ、勝己復活したか。」

「今更だがなあ……つーか響香も起きてんぞ。」

「へ?……あ、ほんとだ。ごめん無視してて。」

「……まあ構ってくれるだけマシー♪」ムニユ

「「グボバア!!」」

「何故三人とも吐血しているんだ?」

『そこは気にしないでやれ。』

「そうだね。」

オールマイトが驚く中、女性がオールマイトの本名を言い、勝己が復活した。さらに勝己が上鳴に響香が起きてるのを確認し、二人がイチヤイチャしているのを女性含め三人が吐血した。それに疑問視する痩せ細った男だがノアに諭され何も言わないでおいた。

「んん!とにかく、紹介しようか……俊典、頼んだよ?」

「わ、わかってますから師匠……。」

「「師匠だつてえええ!!」」

おのオールマイトに師匠がいたなんて!、と思っていたのか三人ともびっくりしている。

「ええと、彼女の名は志村しむら 菜奈なな。私の師匠であり、七代目ワン・

フォー・オール継承者だ。」

「「あ、なるほど!それなら納得する。」」

「あっさり納得したあ!」

紹介したあとに三人が納得したのをびっくりするオールマイト。

「まあいいんじゃないの?俊典?後継者も見つかったみたいだし。」

「ええまあ、そうなんですけど……というより師匠！どうしてここに  
いるのですか!?!死んだはずでは!?!」

当然の質問になるが、

「そのことなだけどね……ここはいわゆる精神世界って所で、全員  
の意識がここに集まってるからその人に根付いてるものが見える事  
がある。私たちはそれに習ってるだけさ。」

「そ、そうですか……。」

なんとか納得したようだが……。

「んでよ、その痩せ細ってるあんたは誰だ？オールマイトに関係あ  
るのか？」

そこはともかくとなのか、次に痩せ細っている男に話しかける上  
鳴。

「うん、そう言われればそうなる。間接的にだけどね。」

「「「???」」」

謎の言葉に四人が不思議と思うが……

「ああ、簡単に言えば私が初代のワン・フォー・オール継承者なんだ。」

「「「はいいい！初代いいい!?!細っ!!」」」

「君達ひどいね!?!」

あまりの発言に初代がひどいと嘆くが、そうも言わないといけない  
と思うほど細いのだ。

「ん！さて、新たな継承者とその仲間には事実を話すべきだ。」

「ええ、そうね初代。あのことを。」

「「「?」」」

話すこと?という雰囲気になる三人だが、オールマイトが真剣な顔  
でいるので三人も緊張感が出る。

「さて、どこから話したのか……まずは何故ワン・フォー・オール  
が生まれたのか、というところからかな?」

「「誕生?」」」

『それに、私の本来の力も言わなければならないな……。』

「本来の力……?」

彼はまだ知らなかった。

彼に対して、数奇な運命、そして、闇の正体を……。

???  
Side

「おい仁、ここはどこだ？しかも俺たちの街に凄く似ているが……。」

「ああ、まさかの展開だぜこりやあ……。別世界のヒロアカの世界かよ。」

「お？てことはここにも出久がいるのか！この出久はどんなやつなのかなー？」

「もう、デツプーさんったら。落ち着いてよ？」ムニユ

「ぐぼお!?か、可愛いなあ！」

「こいつらここまで来てイチャつくか！」

「ほつとけ、しばらくはこっちの世界にお邪魔するんだから先ずはオールマイトに会いに行くぞ。生憎、どうやらあの海岸にいるようだ。さっさと行くぞ。」

「了解！（あいよー。）（分かりました！）」

彼らに出会うのはすぐである……。

異世界からの来人、そして・・・

時は遡ることある世界・・・

「おい仁、俺やデツプーだけでなくあややんも連れて行くのか?」

「え?だって彼女も行きたいっていったし。どうせなら連れてつてもいいでしょ。」

「でもいいんですか?ウエイドさんが一緒とはいえ。」

「あややんは俺が守る!」

「こうなってるわけだし。」

「・・・ま、しゃあないか。嘘も吐いてないし・・・」

「バンザーーイー!!」パアン!!

許可されて喜んでる二人を横に、出久と仁はあることを話す。

「しかしお前がいった神性がある宇宙人ってのはどういうことだ?誰かはわからんが宇宙人から出るのかそれ?」

「ああ、うん。それノアだわ。」

「・・・はい?」

「いやね?ネットで宇宙人と神で調べて《ウルトラマンノア》出てきてな?しかもキングさんと何故か話せてな?話しててそのままのノリで気配を感じてくれたらノアさんなわけよ。」

「・・・そうか。ウルトラマンか。前にお前の世界に来たときもデツプーがオーブの真似したしな。」

「狂火を燃やして、光となる!ちゅーか俺ちゃんオーブ意外に好きだし。」

謎の暴露だがそこまで気にしない二人であった。

「んじやまあ、いっちょ行きますか!」

ヴォン・・・

素晴らしい、手をかぎすとそこに大きなワームゲートが見える。

「ほら、文さんも準備はいいか?」

「はい!」

「文さん、しつかりデツプーに捕まってるよ?」

そう注意しながら、彼らはワームゲートに入る。

移動中・・・

「そういえば仁さん。あなたはこの力を使って様々な世界に行き来してるのですか?」

「そうだけ。それがどうした?」

「いやーですねえ・・・どうしても他の世界の事を知りたくてですね・・・大丈夫です。記事にはしないので。」

「お、そうかい。なら話すかねえ・・・。」

「・・・ってことになったのよ。いやあアレにはそこまで苦戦しなかったけどあ。」

「改めてお前の強さが再確認できたわ。」

「そ、想像以上の凄さですよ・・・。」

別の世界の破壊神との戦いを聞き、神とも対等所か圧勝する仁に呆れる出久と驚く文。

その話がちょうど終わった所で

「お、着いたみたいだな。」

「よっしゃ!あややんすっかり捕まってる。意外に衝撃あるから。」

「はい!」

上鳴の世界に到着後・・・

「んじやまあ、さつきとこの世界のオールマイトに会おうか。」

「オールマイトの気配はあの海岸から感じる。しかもこの世界の上鳴に耳朗、かつちゃんまでいるな。何故かつちゃんまでいるのか・・・?」

何故勝己までいるのか出久は疑問に感じたが、その前に仁に聞くことがあるのか、仁に問いかける。

「そういえば、仁。さつき来る前にいったノアの気配は?」

仁「ああそれね、どうやらオールマイトの所に一緒にいるみたいだ。」

というか特殊空間の中に入ってる。」

「ほお・・・つまり外部からの干渉を無くしてるのか。」

仁

「正解！それはいいとして、先に行ってるぜ。」シユー・・・

そういうと高速移動で海岸へ向かうようだ。

出久

「さて、俺達も向かうとしようか。」【ボーダー マキシマムドライブ  
！】

ボーダーメモリをマキシマムスロットにセットし、スキマゲートを  
開く。

「出て来い、エターナルボイルダー！」

ブウン・・・！

スキマゲートから出久の愛車、【エターナルボイルダー】がサイド  
カーをつけて現れた。

（師匠、勝手ながらサイドカーつけさせて貰いました。すいません！）  
「二人は一緒に乗りたいだろ？サイドカーに乗りな。」

「サンキュー出久！」

「で、ではありがたく・・・うわっ。」

予想以上に座り心地がいいのか、びっくりする。

「お、喜んでくれたみたいだな。実は座席は品質がいい物を使用して  
いるんだ。心地いいだろう？」

「はい！」

「フウウウウウウウ!!何だか気持ちが高まるううううう!!」

「落ち着け。行くぞ。」

ブウンブウン!!

バイクの音が大きく響き、出久達は海岸へと向かった。

数分後・・・



「着いたぞ。既に仁も着いてるな。」

「遅かったじゃないか・・・。」

「流石に反応できないわそれ。」

「なんでだよ・・・。」

ゲイヴンには流石に反応出来ないのである。(ノンケじゃないしね！)

ブウン・・・。

と、どうやら精神世界から出てきたようで、上鳴達が出てきた。

・・・何故かオールマイトが妙にげっそりしているのは気のせいなのか。

オールマイト「うう・・・真面目な話のあとにあんなことをされるとは・・・。」

「プククククククク・・・！」

「響香、笑いこらえろよ。」

「響香、いくらなんでも笑いすぎじゃね？笑っちゃうのはわかるけど。」

どうやら何かしらの話を話していたようだ。

と、目の前に出久達がいるのに気がつき、

「はっ!?しまった、他の人がいる前でがっかりしては！むん！」

出久「いや見栄え張らなくてもいいですよ。それにあなたの本当の姿も知ってるからな。」

「!!?!?!」

出久がオールマイトの秘密を知っていることに驚く四人。

臨戦態勢をとる四人だが、

「やめとけ。オールマイトならともかく、その学生三人は勝てねえぞ。」

「!?!?!?!?!」

仁が事実を言うと、少し迷うそぶりを見せた三人だがそのまま話をする。

「君達は一体何者なのだ・・・? ザイン敵ではないように見えるが。」

オールマイトが極基本なことを問いかける。

「残念だが敵ではない。まあ呈に言う旅行者だ。」

「そんな物騒なナイフ腰に挿してる時点で旅行者じゃないだろ？個性ならまだしも。」

上鳴に反論され、身をすくめる出久。

「まあそうだよな・・・ならこう言おうか。」

そういうとUSBメモリを取り出し、出久は言う。

「俺達は別の次元・・・別世界から来た者だ。」

「どうだ、びっくりしただろう？」

仁が驚くだろうと思っていたようだが、

「二「なんでやねん。また（か）（なの？）。」

「・・・あるええ？」

驚くどころかまたかと呟いているのに困惑する仁。

デツプー「なんかついさつき聞いたとかなん？君達。」

「そうだと言ったら？」

「ご愁傷様としか言えないな。」

何故だか知らないが不思議な空気になっている・・・

「んんっ！とりあえず自己紹介しようか。」

仁が空気を止め、自己紹介を始める。

「俺は石動 仁。感じてると思うが人外だ。よろしく♪」

最初に仁が自分の紹介をした。

「次は俺かな・・・俺は緑谷 出久だ。」

「俺ちゃんはウエイド。またの名を・・・地獄からのsh「やめろ！」

アフィン!？」

某地獄からの使者の真似をしようとしたため、彼は出久に吹き飛ばされたのだ。

「と、とりあえずもう一度・・・デツドプールだ。よろしく！」カタメ

パチリ

響香「きもっ！」

「ぐはあ!？」バタツ

「う、ウエイドさん!？」

「こいつのことは任せてくれあややん。とりあえず自己紹介してき

れ。」

「あ、はい。射命丸しやめいまる 文あやです！記者なのでばしばし写真撮りたいと思いますー！」

「む！記者か！堂々としなければ！」

記者がいるのにどんよりしてはいけないのか、オールマイトが胸を張る。

「とりあえず、そつちも自己紹介してくれ。」

そう出久が言うと、まず最初に上鳴が始める。

「どうも、俺は上鳴かみなり 電気でんき。個性は「電気」、この世界での9代目のワン・フォー・オールの継承者だ。」

（出久は除く）「!?!」「へえ……。」

「やっぱりか。」

出久はそこまで驚かなかったがデップーと文は驚き、仁は感嘆している。

「次は私？」

「そうだな。」

「私は耳朗じろう 響香きょうか。見ての通り音関連の個性だよ。」

「それはもう知ってるけどな……爆豪 勝己と八木 俊典だな？オールマイトといったほうが言いか。」

「!?!」

自分の名前を知られていることに驚く二人。

「一応言っておくが、上鳴と耳朗のことも分かっている。」

「へ？」

「嘘!?!」

出久の世界にも同一人物がいるのだからわかるであろう。

「それはともかく、上鳴。」

「ん？」

突然話を振られ、少しびっくりする上鳴。

「多分だがオールマイトにでも指南を頼もうとしてるだろ？やめとけ。天才過ぎる故に説明が無理なタイプだぞ。」

「なんで私の性格わかってるの？緑谷少年!?!」

なんか知られてる！と嘆くオールマイトを背に、話を進める出久。  
「俺もワン・フォー・オールの継承者だからな。教えることはできる。」

「「え?」」

唐突に放たれた暴露に困惑する四人。

「あ、ほんとだ。OFAの光感じる。」

「わかるの!」

OFAが放つ光を感じ取ったのか、二人は継承してるのだと認識する。

「で?教えてくれるってことになるけど、最初になにするの?」

「まずは今自分の体がどこまでOFAに耐えられるか調べる。体全体に広げるイメージをするんだ。」

「了解・・・こうか?」

上鳴は体の中にあつた力を体の全体に均等に分けるようにやって  
いると・・・。

「・・・!ここまでか。」

「おお!ここまでとは!」

「かなりの肉体の強度だな・・・言つて20%の出力か。」

今上鳴の全身には赤い稲妻が走っている。これこそワン・フォー・  
オールの力の一つである。

「それで、この状態で何かするのか?」

「そうだな・・・。オールマイト、ここに来た理由は?」

「そうだな・・・。」

この海岸のゴミ全てを除去しながら彼の肉体を鍛えるためだ。

「

特訓開始　　く引き出しがありすぎる出久く

「この海岸を綺麗に・・・?」

上鳴がそう言うと、

「その通り!」ムキムキムキムキ・・・!

そう言うとオールマイトはトウルーフォームからマッスルフォームへ変身する。

「今の時代、派手な活動が必要みたいに言われてるけど本来ヒーローってのは自己犠牲で行動することさ!ということでのこの海岸にあるゴミを全て片付けるぞ!」

「合理的だ。だがそれだけだと物足りないと思うから俺も助言とスパリングの相手にはなつてやる。」

そういうと白色のUSBメモリを取り出し、腰に赤いベルトを装着する出久。

「それがもう一つの個性かい? 緑谷少年。」

「そうだ。詳しいことは省くが、このベルト【ロストドライバー】にこのUSBメモリ、【エターナルメモリ】を挿して変身することが出来る。」

「ほう、変身か! 興味深いね!」

「お気に召したようだな。」【エターナル!】

出久はそう言うと、メモリを起動し、スロットに差し込む。

すると待機音が鳴り、その間に出久は左手を顔の右側に翳し、右手はスロットに添えるポーズをとる。

「変身」

そう言うとスロットを右に傾ける。

すると、Eのロゴが回転しながら浮かび上がる。

【エターナル!~~~~♪~~~~♪】

メモリから音楽が流れ、出久の周りに粒子が舞い彼の体を包む。

そうすると、彼のもう一つの姿が見える。

複眼は∞の形を現し、頭のアンテナもEを横にしたように見える。

手足には蒼いファイヤーパターンがあり、胴体には黒いスロットが

何十にも繋がっているようだ。

黒いマントを付けており、腰には先ほど見た特徴的なナイフが収納されていた。

その姿はまるで死神のように見え、正義の戦士のようにも見えた。

「それが……。」

「仮面ライダーエターナル。通り名は蒼炎の死神だ。」

「死神か……似合うな。その姿なら。」

勝己がそんなことを言えば、

「出久、俺とあややんのこと忘れてない？」

「……あ、すまん。デップーも変身すりゃいいじゃねえか。」

「お、そうか。強烈だけどな、俺の姿。」

「「??」」

「では早速行きましょか！」キュピーン！【デンジャラスゾンビィ……】  
デンジャラスゾンビガシャット  
白いゲームカセットのようなもののスタートアップスイッチを押し、起動する。

【ガッチョーン……】

禍々しい声とともに、腰に紫色のパッドが装着される。

禍々しい待機音が鳴り響き、ガシャットをパッドに差し込む。

【ガッシャットオー！】

ピロン……【バアグルウアップウ……】

濁っているような音と共にデップーの目の前に白枠で黒いパネルが出現する。それをデップーは砕く。

「ブウン、ブウン!!」

なんかネタに走ってるけど気にしないのが吉だ！

【Danger! Danger!】【Genocide!】

【Death the Crisis!デンジャラスゾンビィ……!】

【Woooooo!!】

パネルを砕き現れたデップーの姿は禍々しい存在だった。

白と黒の骨のような鎧にオッドアイの赤と青の目、ひび割れたゴーグルに胸にある中身が無いゲージ。

それこそ自称神と名乗った男が変身した恐怖の仮面ライダー。

「仮面ライダーゲム、ゾンビゲーマーレベルXだあ!!」

「うっわ、正にゾンビって感じすんな。」

上鳴がそう言えば、

「まあこの姿ってゾンビゲームがモチーフだからね。」

「つーことは『バイオハザード』!？」

「え、そこに反応するん?」

勝己がゾンビゲームからバイオハザードに話を発展させたのが意外だったようだ。

「どうせならハンターとかも連れてきたら面白くなったな。」

出久がそんなことを言うが、

「んんっ! 特訓開始してもいいかね?」

「」「あ、はい」「」

〜最初に〜

「とりあえず捨てられてる冷蔵庫だとかを潰したりして上にあるトラックの荷台に……って早いね!」

「仕事速いな……それにもうOFAに順応してる。」

「えっさ、ほいつさ。つと、伊達に体鍛えてないですから!」シユツ!

〜特訓中に〜

「ちよ、技のレパートリー多くないか出久!？」

「こっちはガイアメモリが大量にあるんだ。レパートリーは嫌でも多くなる。そら行くぞ!」

【アクセル マキシマムドライブ!】【ジョーカー マキシマムドライブ!】

「うおおおおお!?! 追いつけるか!」

「追いついてみせろ!」

「なんでや!」

〜特訓の外では〜

「・・・それであんなにくつついてたんですね、響香さん?♪」

「!?／／あんまり大きな声で言わないで下さい!」

へコツチニヒビイテルゾーキョウカ

へ・・・アリガト、キョウカ

「!!／／／／／」

「なんかこつちまで甘くなってきたんだけど、どう思う勝己君?」

「ブラックコーヒー買って来るわ。いる?」

「頼んだ。」

「ウエイドさーん!」ムギユ

「グハア!や、やっぱ可愛いなあもう」アタマクシヤクシヤ

「にへへへ・・・。」

〜二週間立って〜

「ふう・・・なんとかなってきたな。」

「既に4分の一を終わらすとは・・・やはり天賦の才能があったようだな。」

「更によえばOFAの出力も25%とだが着実に成長している。」

「あ、そうだ。二人とも一つ質問が。」

「ん?ないだいな(なんだ)?」

「昨日の夜、夢の中で歴代継承者の一人かな?ファンキーな男と会って個性増えたんだけど・・・。」

「・・・はい!」

「なに・・・?」

〜新たな個性について〜

「黒い鞭の個性・・・私も知らないことが起きるとは・・・!」

「どうやらOFAの歴代継承者の個性が使えるようだな・・・まだ一人だけだが。」

「しかもこれ、かなり使いやすいですね。こんな感じで。」ヒョイヒョ



イ・・・ズドン

「・・・これも継承者によって変わるのだろうか・・・？」

「それであんまりゴミ片つげないでね！」

〜一カ月後〜

「おお・・・！一ヶ月で半分か！」

「早いな・・・。」

「あらよつと！」ドスン！

「さて、あつちは・・・あつちもテンポよく進んでるな。」

〜勝己達の様子〜

「ほらほら！俺ちゃんはその簡単にはしなないぜえ？」

「ち！超再生の個性かよ。めんどくせえなおい！」BOOM！

「うおっ！ちよいと火力強くなった？」

「あ？・・・確かに、ここ一ヶ月でなんか爆発力強くなったな。」

「少しは・・・成長しんじや、ないっ？」

「いい調子ですね、ここまで行けば出久さんが言ってた以上に強くなるんじゃないですか？」

「ありがとうございます！」

〜そして二カ月後〜

「よっしやああああああああああ！！」

「まさか二ヶ月で、しかも指定範囲以外の所も片付けるとは・・・！」

「予想以上だな・・・。」

「うわああ・・・こいつは綺麗になったなあ・・・。」

「お、終わったみたいだな。」

暫く消えていた仁が出てきた！

無視する

▼とりあえずどこにいったか聞く

何をしていたか聞かないでおく

「おい仁、お前いつの間にか消えてたが何してた？まさかオール・フォー・ワンと会ってたとか言うんじゃないぞ？」

「いやいや、流石に会わないぜあんなやつとは。まあ簡単に言えばこの世界のことを詳しく調べてたんだよ。」

どうやらこの世界のことについて調べていたらしい。

「それで？何か気になることでも見つけたか？」

「おう、まず一つは・・・」

お前どころか緑谷家族の戸籍がなかったぞ。

」

「む・・・。そうか。」

なんとなくだが納得してしまった出久。

「まあ簡単に言えば、この世界には【緑谷 出久】がいない、I F<sup>もしもの</sup>の世界ってことだ。」

「あ、そゆことね。ならわかるわ。これまで何度か見たことあるわ。」

「そうなのかデブプー？」

「ああ、俺ちゃんは平行世界のことを認識することが出来るんだ。上鳴には言っただけだったな。」

「それ響香から聞いてた。」

どうやらある程度は知っているようだ。

「ならいいわ。まあ簡単に言えば俺と出久、それに仁は平行世界があることを知っているし、仁にいたっては友達の家に行く感覚で世界巡ってるぞ。」

「・・・仁、お前・・・。」

「いやいや!?何でそんな哀れな目で見るとだよ!」

「いや、なんか寂しそうな感じしたから。」

「What!」

何故か英語で返している仁。

「とにかく、そろそろ俺達も帰ろうと思う。」

「お、そうだな。ということとで土産を適当に見繕ってきたぜ。」

異空間から紙袋を出し、それを高らかにあげる仁。

「ナイスだ仁!そんじやささつと帰ろうぜ!」

「おっと、ちよつと待つんだデッブー。」

「ん?どうした仁。なんか渡す物でもあるのか?」

そう言うのと、仁は完全聖遺物のガイアメモリを上鳴に渡した。

「ほい、上鳴。これ持つてろ。」ヒョイ

カシャ「うおっ!...これってガイアメモリ?」

「そうだ。だけとただのガイアメモリじゃあない。」

「お前...またギャラルホルン作ってたのか。」

そう出久が言うと、彼もまたガイアメモリを取り出した。

それはまだ何も書かれていないメモリであった。

「さて、響香。お前にプレゼントだ。ありがたく受け取れ。」

そう言うのと、そのメモリをカタツムリのような双眼鏡にセットした。

【サーチ...アナライズ...コンプリート・フェイルノート】

機械音でそう聞こえると、メモリの色が変わり、Fの文字が書かれているメモリへ変化する。

そのメモリを響香へ渡す出久。

「これはシンフォニックメモリ。ある世界で聖遺物と呼ばれるものをアームド化して纏うのをガイアメモリにしたものだ。」

「お、新しいのを作ったのか。」

そう仁が言うと、そうだと出久が言う。

「響香にはシンフォギアは似合うしな。個性しかり趣味しかり。」

そう言うのと、出久は自分が持っているシンフォニックメモリを懐から出す。

「ちなみに、俺も仁から何個かは貰っている。これは俺が作ったやつだが。」カチツ【アメノハバキリ!】

メモリのスタートアップスイッチを押し、自分の体に挿そうとする出久。

「どうせなら試運転ぐらいは付き合ってやる。メモリの下にあるスイッチを押すんだ。」

「う、うん。わかった。」【フェイルノート!】

既にエターナルへ変身している出久は胸に、響香は腕にメモリを挿す。

「詠装!!」

《Determination edge Amenohabakiri tron》  
《Seoul Shoot out FAILNAUGHT》  
zzl》

(因みに出久の姿はエターナルドーパントさんの作品、《僕のヒーローアカデミア》Eの暗号) PHASE1《第49話にて描かれています。そちらで妄想おなしやす。ByうP主)

二人の姿一度輝き、その光が薄くなっていき二人が見え始めると、響香の変わりようがわかる。

——耳が出るように出来てある頭のヘッドギア——

——全身に装着されている軽装タイプで赤色のアーマー——

——腰に提げられている一対の双剣——

——そしてその手に持つ、見たものをを必ず貫きし神話の弓——

「うわ・・・！なにこれ？」

自分の姿の変わりように驚いている響香。

「ふうん・・・名前も付けるべきだな。」

「お、そうだな。」

出久と仁が名前を決めるようだ。

「弓に加え腰に一对の双剣か・・・しかも双剣は干将・莫耶じゃねえか。」

「うーん、これなんか見たことあるなあ。」

「ん？どういことだ？」

出久が仁にどういことか説明させる。

「俺は色んな世界巡ってるって言ったろ？その時にな、伝説とか伝承の英雄達がサーヴァントって呼ばれる存在になって聖杯を巡る戦いをしてた世界にいったことが会ってな。その時にこの双剣の持つて戦ってた英霊がいたんだよ。」

「なるほど。そっから出すのか？」

「いや、その世界の名前を引っ張るわ。」

「そうか。なら言ってくれ。」

「おk。じゃあそのシンフォギアの名前は・・・」

【Fate<sup>フェイト</sup>フェイルアーチャー】ってのはどうだ？

」。

## 雄・英・入・試／hになるために

異世界から来た緑谷 出久や仁、さらにウルトラマンノアとの話し合いと特訓から早10ヶ月が過ぎた……。

電気・響香・勝己はトレーニングなどをしながら連絡をとりあったり、たまに二つの町で近い公園で組み合いをしたりなど、雄英高校受験に向けて日々明け暮れていた……。

そして遂に受験当日……。

「ごめん、少し遅くなったわ。」

「気にしねえよ。早く起きてお前ら置いてった俺がわりいな。」

「はあ、まったく朝起きていきなりLINEの通知があったから見たら先に出たって来てたから早くない？って思ったよ。」

「すまんって！おら、さっさと行くぞ。これで遅れたらヒーロー失格だしな。」

「よし、いこう」

三人は試験会場の前でこんなことを言いながら、会場へ入っていった。

↳試験会場内↳

「二筆記のほう楽勝だったな。」

「( )( )(こいつら……平気でそういうこと言うのか!?( )( )( )」

周りのことに気づかなく、素でそう言ってしまうほど彼らにとつては簡単であった。

(この三人は普通に頭がいいです。三人とも英才教育をいつの間にかしていました！)

《今日は俺のライヴによるこそー!!受験生のリスナー！実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!アーユーレディ?》

今はプロヒーロー【プレゼント・マイク】の説明を受けながら少し話をしている。

「んで、とりあえず響香。これ。」ヒョイ

カシヤ「おわつとつと。シンフォニックメモリ？」

電気は響香にシンフォニックメモリを渡し、自分はいつでもネクサスアーマーを装着できるようにエボルトラスターを呼び出す。

「・・・おい、いきなりそれ使うのか？」

勝己が少し躊躇するような言葉を出す、

「いや、ここで見せ付けるんだよ。」

「・・・そういうことか。OK、把握した。」

彼の秘密を知っている勝己は意図を把握した。そして少しだけだが獰猛な笑いを小さくした。

～実戦会場A～

プレゼント・マイクが説明してる時に、生真面目ですと言いそうな青年が質問をしていたが、そこはスルーして。

「勝己とは別か・・・運がいいのか悪いのか。」

「まあいいんじゃない？こつちもこつちで遠慮なく受けれるし。」

【フェイルノート！】

そう言いながらメモリを起動する響香。それと共にエボルトラスターを鞘から取り出す電気。

「む！そのカップル、少し静かに」「取り込み中です！」「・・・。」  
注意しようと思ったら逆に注意された生真面目な青年。

(ドンマイ飯田！Byうp主)

「詠装。」《Seoul Shoot out FALL NAUGH  
T z e z z z l 》

「ネクサス」

二人が一度光に包まれ、光が消えるとそこには、アーマーを纏う二人がいた。

(上鳴のネクサスアーマーについては、後書きで書いてあります！B  
ようp主)

《はいスタートオ!!》

「しっ!!」ヒュン!

「ネクサスダツシユ!」ビュン!

いきなりの開始宣言にも反応し、ゲートから二人が飛び出す。

《ほらほらすぐに動けえ!もう賽は投げられてんぞ!カップルももう  
10Pづつ入ってるぞ!》

「「「げっ?!あのカップル早えし強くねえ!」「「「「」

戦場仕込みの男とのスパリングにNo1のプロヒーローに教え  
られていたのだ。

この程度、造作もない。

く試験会場Bく

「さてと、あいつら絶対派手にぶちかますだろおなあ・・・。」

勝己は既に電気と響香が派手に戦うのを予想していた。すると

《スタアトオ・・・》

気の抜けた声と共に開始の合図を聞くと、

「おら行くぞゴリアア!」BOOM!

少し規模を小さくし、加速重視の爆破を起こしゲートから飛び出  
す。

《試験生諸君、もう実戦試験は始まっている。既に一人飛び出して  
るぞ。動け動け。》

スピーカーから気の抜けた声がまた聞こえると一斉に試験生が我  
先にとゲートから飛び出す。

く試験会場Aく

「そらあ!」ズガン!

「ブチコ」ガアン!



——風よ風 煽れ この胸燃える♪——

「穿てー！」ビュン！

「シネX」ズバン！

電気、響香は二人で共闘しながらポイントを稼いでいた。

すると、近くで金髪の青年が周りを敵ロボット6体に囲まれていた。

「うっ！腹が痛く・・・！」

一瞬腹を押さえるような仕草を見せてしまい、ロボットに殴られそうになったが、

「おりゃー！」ギューイイイイイン！

バガアアアン×3

電気が放った光線（出力1割）によつて三機が爆発し、その間を通り一度包囲網から脱出する青年。

そのまま腰のベルトからビームを放ち、残りの三体を破壊した。

「あ、ありがとそこのカップル！」

「カップル公認されてる!? まあいいけど！」ギュン×2

カップルということに対して少し驚いたが気にせず別の場所に移動する二人。

（試験会場B）

「おらあー！」BOOM×2

「ブチコロs」ドカン×2

勝己もまた、爆破で器用に避けたり爆破をロボットに浴びせ的確に壊している。

すると、近くで戦っていた女の子がロボット4体に囲まれていたが、

「邪魔だ！」BBBBOOOOM!!

勝己によつて二体が倒され、残りの二体を大きくした手で破壊する。

「おいそこの女！大丈夫か？」

「大丈夫！ありがとう！」

ニコニコしながらこつちに手を振る少女に、少しキョどる勝己だが、すぐに移動を開始する。

「なんかあの子、どつかで見たことあるような……。」

く試験会場先生室く

「今年は豊作みたいだね！」

「ああ、特に会場Aのカップルと会場Bの爆破の青年がいいね！」

先生らによつて髓しチエツクされている全ての会場で、一際目立っている電気と響香、勝己。

(頑張っているようだね……三人とも！)

オールマイトも嬉しくなる。

「だが、こつからが本番なんだよね！」ポチツ

そう言うと、あるスイッチを押す。

く試験会場Aく

「ほいっと。」グシャー！

「はっ！」ビュン、ドガンー！

順調にポイントを稼いでいく電気と響香。すると

ドガアアアアアアアアアアアン!!!

突然何かが落ちたような音が遠くから聞こえてきた。

どうやら説明されていたお邪魔虫が出てきたようだ。

二人は向かい合い、頷いて音が鳴った方へ移動する。

く一方会場Bではく

「おおおらああ!!」BBBBBOOOOMMM!!

「ギャアアアアアアアアアア!?!」

勝己は近くにOPの敵が現れたため、先にそれを潰していた。

ロボットの状態は既に半壊していて、もう少しで再起<sup>リタイヤ</sup>不能できるよ  
うだ。

「ガアアアアア!!」ブウウウウン!!

満身創痕の状態でも拳を当てに来るロボットだが・・・

「へ!好都合だ、まとめて吹き飛ばえ!」BBBBBBBOOOOOOO  
OM!!!

さつきやつた爆破より更に強い爆破を行い、ロボットを大破させ  
た。

く会場Aではく

「うわああ・・・でかいな。」

「でかいね。」

近づいて見て、かなり大きいことを確認した二人。

「逃げるんだあ・・・勝てるわけNAIYO☆」

「ひ、避難だあ!」

「わりいけど急ぎの用事が出来ちまったんで・・・じゃ!」ピシユン!

「カカロットオオオオオオ!!」ギユピギユピギユピギユピ・・・ギャン

!

「んぎやああああ?」

・・・なんかMADが入ってる気がするけど気にしない!

「よし、あれでも使うか。」

《使うのか・・・いいぞ、だが出力は控えめにな。》

「ああ。」

二話ぶりに登場!ノアさん!

「あ・・・ロボットどこまで飛びそう?」

「うーん、そこまで飛ばさないようにはするが・・・宇宙までは飛ばさ  
ないようにしよう。隕石の落下みたいにはさせない。」バチバチバチ

バチ………!

そう言いながら両腕に白いエネルギーを纏わせる電気。

「……!?おいその君!あれに立ち向かわなくてもいいんだぞ!」

先程二人に注意した生真面目の青年が電気にそう言うが

「立ち向かうのがヒーロー、だろ?」バリバリバリ……!

更に光が増し、溢れそうになる。

「よし、充填完了!行くぜ!」

いざ撃とうとした時、近くの瓦礫で埋もれている少女を発見する。

「すまん響香、行つてくれるか!」

「OK!任せて!」

歌いながら反応し、疾走してその場に駆けつける響香。

——突き進め 掲げた旗の下で♪——

「うう……つて助けてくれるの!」

「困った人は助けるのが、ヒーローだからね!」

そう言いながら瓦礫をどかし、少女をその場から退避される響香。

そして一度アームドギアを解除する響香。

「さ、流石に歌いながらはきつい……!」

そして周りに誰もいないことを電気に教える響香。

「OK!誰もいないよ!」

「よし、行くぜ!」バチャバチャバチャバチャ……!!

「《color:#c5c4c4》クロスレイ・シウトローム!!!」  
color」

ギユイイイイイイイイイイ……!

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ・・・ド  
ガアアアアアアアアアアアアン!!

電気が放った必殺光線、「クロスレイ・シウトローム」がOPのロボットの当たり、数秒ほど光が止まっていたがすぐにロボットを押し出し、

そして爆発した。

《試験しゆりよおおおおお!!》

その声が会場全体に聞こえると、ロボット達が次々と止まる。

「終わったか。」

そう言うと、上鳴はアーマーとOFA・フルカウルを解除する。

「ふう、そこまで負担も掛からないな。これだと。」

(一応はネクススの力が負担を抑制しているからな。)

そう言うと、ノアが手伝っていたことも分かる。

「お疲れ様。さ、帰ろう?」

「そうだな。その二人も大丈夫か?」

そう上鳴が言うと、近くに避難していた二人は頷く。

「大丈夫みたいだな。じゃあ帰るか。」

「うん。」ギユ

## 結果と報告と共有と

雄英高校の試験から三日後、上鳴達試験者には合格安否の届け物が来ると話を聞いていたので、上鳴は気長に待っていた。

すると、

「電気ー！雄英から届け物来たわよー！」

「！すぐ取りに行くー！」

自分の部屋にいた電気は、母がいるリビングへ行き、雄英から来た届け物を自分の部屋で持っていく。

～上鳴の部屋～

「さて、どうなったか・・・。」ソワソワ・・・

早速包みを開け、中身を確認する。

開いてそこにあつたのは、投影型の機械であつた。すると

《私が投影されたあ!!》

「うわあお!」ガタガタゴツトン！（ズツタンズツタン!）

突然投影されたオールライトに驚き、椅子から転げ落ちる電気。

《ハツハツハツハ！椅子から転げ落ちているのが見えているよ!》

「エスパーか何かなん!？」

転げ落ちたことを予知しているオールライトにまさか中継でもしているのか!?!と詮索する電気。

《え?時間が無いから巻いてくれ?いや彼には言いたいことが・・・わかつた巻こう!》

「メタイなおい!!」

メタイ発現にツツこむ電気。そんなこともお構いなしに進むオールライトの結果発表。

《まずは筆記試験！これは簡単だったようで見事満点だ!》

「お、満点か。」

思ったよりいい点数だったのか、嬉しくなる電気。

《そして実技試験！これは敵をただ倒すだけじゃないのがネックだ!》

《人助け、すなわち救助ポイント！レスキューP！これは審査制だが君は最高だ！》

「ほう？」

自分が特別なことをしていたのかと思いつける電気。

《中盤で一人少年を助け、終盤にはOPの敵を倒し被害を最小限に抑えた。これだけでも十分だ！》

「まじか・・・俺そんなに稼いでたんだ。」

予想以上に稼いでいたのを感じていなかったのか、驚く電気。

《総合ポイント 159ポイント！首席で合格だ上鳴少年！こいよ少年！ここが君のヒーローの始まりの場所だ！》

「・・・いよっしやああああああああ!!!」

嬉しさあまりに叫んでしまう電気だが、防音性が高い部屋になっていたため外には聞こえなかった。

プルルル、プルルル・・・

すると、電気の携帯に電話がかかる。相手は響香のようだ。

「もしもし？響香か？」

〈もしもし!?受かった!?〉

「勿論！響香は!」

〈受かった!〉

「いよっしや！今夜はカラオケだ！親にちよつと出かけるって言うってくるー!」

〈その前に勝己からライン来てるよ!〉

「何!?あ、ほんとだ。ちよつと電話するよ。準備してて。」

〈りようかい!〉ピッ!

一度響香と通話を切ると、勝己に電話する。

プルルル、プルルル・・・ピッ!

「もしもし、勝己か？」

〈おうそうだ。お前ちやつかり首席取ってンじゃねえよ!〉

「・・・なんかすまん。てことは勿論?」

〈合格だ!〉

「よし！今からカラオケにいかね？受かった記念に！」

へカラオケ？最近行ってねえしなあ・・・行くか！

「勿論割り勘だぞ！」

へOK！〜ブツツ！

「勝己もテンション上がったたな・・・普段とのギャップが「ピロン！」ん？」

勝己が電話を切ったあと、グループラインに勝己が投稿したらしい。それを見ると

爆豪勝己：普段とのギャップ差がありすぎると思っただろ電気？  
すぐさま返事する電気。

ライジング（上鳴 電気）：何故ばれた

爆豪勝己：気づくわ！

ライジング：なんでや！

イヤホンウーマン（耳朗 響香）：準備完了！

二人：早！

爆豪勝己：許可貰うの早すぎんだろ

イヤホンウーマン：まあ電気と勝己と遊びに行くっていったら即答でOK貰ったし

ライジング：今俺もリビングに降りて聞いたけどOK来た

爆豪勝己：お前もか。今聞いたら早めに帰ってこいつって言われただけ  
でOK貰ったんだが

ライジング：よし、集合場所はいつもの公園な！

二人：OK！（わかった！）

〜カラオケ店内〜

「〜星屑のように誰かの！願い事を背負い生きてやれ！」

「おく、お前もうめえな電気。」

「さっきのシャウトかましといて何言ってるの？勝己。」

「お前も大概だがな。響香。」

「ふふっ♪♪」



なんやかんやで親も歌いたいといい、それぞれ親と子供で別れ歌う彼ら。

ピロンピロンピロンピロンピロンピロンピロンピロンピロン!

「あ、もう時間か。」

「3時間って早いな。」

「そうだね、最後どうする?」

響香が二人に声をかけると二人はうくん・・・と唸る。

「俺と響香でデュエットもいいけど・・・。」

電気がデュエットを提案してくるが

「最後までくれえ三人で歌わねえか?」

「それだ!!」

勝己が提案した三人で歌うので決定したようだ。

く午後の5時、公園のベンチにてく

「ふうく・・・楽しかったなあ・・・!」

電気がそう言うと

「だな。久々に楽しんだぜ。」

勝己がそう言えば

「うん!」

響香が嬉しいようである。

・・・電気の肩に寄りながらだが

「もう今日はもう解散すつか?」

「そうだな。響香も眠たそうだし。てか可愛い。」

「溺愛してんなああいからはず。」

「zzzzzzzz・・・」ムニユ

「ガファ!」

「おい大丈夫か!?吐血したけど!」

響香の胸が電気の腕に当たり、その感触に電気が吐血してしまい、

勝己が心配する。

「だ、大丈夫。ちよつと悶えてただけだから。」

「ちよつと可愛いからって吐血すんのでどうなんだ・・・？」

「そこは気にしないのがいいぞ。」

「あつはい。」

こうして、上鳴たちは無事、雄英高校に入学することが出来るようになった・・・。

なぜ俺達はヒーローになりたいのか

7話の話から数日後……。

電気達三人は駅で集合してから雄英高校へ向かった。

→電車内で→

「しっかしお前首席取るとかマジかよ。俺も筆記は満点だったのに。」  
電車に乗ってすぐに試験結果について言及する。

「いやー、あれについては俺も知らなかった。実技試験でどうやら勝己を離してたっぽいから。」

「レスキューポイントのことか……俺の個性って救助向きじゃねえんだわ。」

電気の首席の理由を把握している勝己は、自分の個性が救助向きではないと言うが

「いやいや、瓦礫とか退かせられるんなら十分だろ。」

「そうだよ。それに場合によってなら個性を生かされる場面もあるよ。」

電気と響香に励まされ、いつも通りになる勝己。

へまもなく、○○駅に着きます。→降車の方は右の扉から→降り下さい。→

どうやら目的の駅に到着したようだ。

→雄英高校前→

「」でっけえ……。」

どこから見ても「H」という字に見え、更にでかい雄英高校に感嘆する三人。

「よっしゃ、んじゃ早速入ろうじゃなえ!」コツン

「勝己!」

入ろうとした瞬間、躓いた勝己。このままでは顔面がコンクリートの地面に叩きつけられるが

フワア…

「「え？」」

倒れる前に勝己が浮かび、なんとか倒れるのを防がれた。

「お？おとおお？なんかこれクセになりそうだわ。」

「重力が無くなつて、宇宙にいるみたいになつてるのか？」

「こそ、そんな感じだ。」

「だ、大丈夫？」

すると、茶髪の女の子が現れた。

「あん？お前が助けてくれたのか？あんがとな。」

「!?う、うん。私、麗日<sup>うららかに</sup> お茶子<sup>おちやこ</sup>つて言うんだ。」

（あく、あれはドキドキしてるな。）

（勝己も恋人出来そうだな。私は電気一筋だけど。）

二人が心の中でお茶子の恋を感じると

「そ、そうだ！解除しないとね！」ブニツ

お茶子が両手の指を合わせると、勝己が地面に着地する。

「んんっ！とりあえずA組いこうや。」

「あ！私もA組だから一緒に行こうよ！」

くA組教室前く

教室前のドアに辿り着くと一言葉。

「「デカツ!!」」

異形系の個性に対応してか、大きめのドアになっているのに反応！

「ま、まあ取り敢えず入ろうか？」

「何故そこで疑問形なんだよ電気。」

「・・・なんかすまん。」

ガラガラッ!!

勢いよくドアを開ければ・・・

「お、もしかしてあの時のカップルかい!？」

目の前に金髪の少年が！

「あ、あの時お腹押さえてた！」

「なんかキラキラしてたやつか！」

「あれ!?なんか覚え方がおかしい!？」

「どうやら覚え方に不服のようだ。」

「僕は青山あおやま 優雅ゆうが、よろしくね☆」

「「うわあ、キザな奴だ（だな）（だねえ）」」

「ひどくないかい!？」

早速色々ひどいことを言われる青山。

仕方ないね♪（Byビリーヘリントン氏）

「む、君たちは実技試験で活躍していたカップルじゃないか！」

次に声を掛けてきたのは如何にも優等生ですと言わんばかりの見た目の青年であった。

「俺は飯田いいた 天哉てんや。私立聡明中学出身だ！」

「俺は上鳴電気。よろしく。」

「私は耳郎響香。電気と同じ学校だよ。」

「俺あ爆豪勝己。多分分かってんだろおがよろしく。」

「私、麗日お茶子、よろしくね!」

「お友達ごっこしたいなら他所でやれ。ここはヒーロー科だ。」

「「「「「「「「「「「誰!？」」」」」」」」」」」」」」」」

よく見れば、教卓に寝袋らしき物の中に人がいた。

「はい、静かになるまで8秒かかりましたね。君達は合理性が欠くね。」

そういうと、男「相澤あいざわ 消太しょうた」はゼリー飲料を飲み一言。

「担任の相澤消太だ。よろしくね。」

## 個性把握テスト／Aの思惑

「いきなりだが、これ着て運動場にこい。」

そういうと、麻袋から全員分の体育着が出てきた。

(いや、どうみたってそっから出したら汚いだろ。)

心の中で上鳴が言うが、そんなことはお構いなしに話を進める相澤。

「これ着たらグラウンドに來い。直ぐにな。」

『は、はい!』

少年少女移動中

グラウンド中央へ集合する上鳴達。

「さっそくだが個性把握テストするぞ。」

突然の一言に

「いきなりですか!?!」

「入学式は!? ガイダンスは!?!」

二人ほど不満を叫ぶものがいたが相澤は軽くあしらう。

「ここ、『雄英高校』は自由な校風が売りだ。教師側もしっかり。そういうことだ。」

と、言いながらテストの説明を進める。

「首席合格の上鳴、中学時代のソフトボール投げの最高記録は?」

「59mほどですが。」

「お前結構飛んでんじゃねえか。」

上鳴の記録に反応する爆豪。

「じゃ、個性使って投げてみる。円から出なければいい。思いっきりいけ。」

そう言われると、上鳴は30%の出力でOFAを使いボールを殴り飛ばす。

一瞬にしてボールが消え、彼方まで飛んでいくのがなんとなく分かる。

「記録は……1145.14mか。」

「「「「「い、一千越え!」「」」」」」」

ボールの耐久力もさることながら距離に驚く。

「やるじゃねえか。」

「一千超えか……流石OPロボットを破壊した一人だ。」

「!? そういえば、あの巨大ロボットを破壊していたな上鳴君は!」

試験時にその場にいたことを忘れていた飯田が反応する。

「は? あの巨大ロボットぶっ壊したのかよ!?! めちゃくちゃ過ぎる!」

頭に葡萄らしき物体がついている少年、「峰田 実」が驚いているが上鳴は反応せずにスルーする。

「ソフトボール投げ・立ち幅とび・50m走・持久走・握力・反復横とび・上体起こし・長座体前屈。中学のころからやっているだろ?」個性“を使わずやっているはずだ。国は平均記録ばかりとりたいたいらしいな。

文部科学省の怠慢だよ。」

そう言うと、他の生徒から声上がり始める。

「なんだこれ! すんげー面白そうじゃん!」

「個性が使えるなんて、流石ヒーロー科!」

それぞれが反応をする中、その言葉が届いたのか相澤が一言。

「……面白そう、か。ならこうしよう、今回のテストで最下位だったやつは除籍にする。」

「「「「「!?!」「」」」」」」

そう言うと、生徒達から批判が上がる。

「初日から除籍だなんていくら何でも理不尽すぎる!」

生徒の一人がそう言ったが

「自然災害、大事故、身勝手な敵。いどこから来るか分からない厄災。日本は理不尽に塗れている。そんなピンチを覆して行くのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったのならお生憎。これから三年間、お前達には絶えず試練が与えられていく。プルスウルトラ、全力で乗り越えて来い。デモンストレーションはこれで終わりだ。」

その言葉にほとんどの生徒が絶句していたが、上鳴・耳朗・爆豪・

八百万・轟などの優秀な生徒は落ち着いていた。更に言えば爆豪だけは狂気的な笑みを浮かべていたので爆豪の周りにいた生徒はドン引きしていた。

「さ、テストを始めよう。俺は時間を無駄にしたくないからな。さつさと準備しろ。」

その言葉を合図に、上鳴達はテストを開始する。

く50m走く

「ワン・フォー・オール・フルカウル…30%&ライジンレッグ！」

ギウウウウウウウウ！！

ピツッ！「…上鳴、2.69秒。」

「は、速い…！追い越されてしまった…！」

「ちっ、火力が足んねえな。また鍛え直さねえとな。」

最高記録を簡単に更新されて悔しさが出る飯田ともっと速く出来たと思えば更に鍛えることを決める爆豪。

く握力測定く

「ふん！（バキッ！）あっ…先生、壊してしまいました。」

「…測定不能。」

電撃で測定器を壊すわけにもいかず、ライジンアーマーを使わずOFAのみでやったが寧ろそっちの方が壊れやすかったようだ。

それを万力や複数の腕で測定器を使用している生徒は驚きで目を丸くして上鳴を見ていた。

「あいからはず、電気は規格外だなあ…」メキメキ…！

「いや、君も他の人に比べたら規格外だからね！」

飯田にツッコまれる響香であった。

く立ち幅跳びく

「ネクサスー！」

フルカウルの代わりにネクサスアーマーを使い、空を飛ぶ上鳴。

「上鳴、いつまで飛んでられる？」



「その気になれば一日、途中空中でご飯とか食べれば2日3日飛べます。」

「…無限。」

く 反復横跳びく

「フルカウル・ライジンレック！」

50m走と同じ構成で記録を出そうとする上鳴。

ピッ！「…測定不能。」

「また!？」

「…普通じゃ出ないぞ、あんな記録。」

測定不能がまた出たことに啞然とする瀬呂と轟。

その近くでは、反復横跳びに自信があつたのか、峰田 実がうな垂れていた。

く ボール投げく

「えい！」

ピッ！「…無限。」

「すげえ！また無限でた！」

無限を出した麗日の次に上鳴が円の中に入る。

「上鳴…まだ全力出してないはずだ。これで出せ。」

「……………!？」

その言葉に全力を知っている麗日・響香・爆豪・飯田以外の全員が驚く。

「嘘だろ…まだ全力出してないのかよ！」

「今まで抑えてたって言うのかよ…！」

「そんな…。」

「……………」

推薦入学者である八百万と轟も驚いている中、上鳴はある方向を向く。

すると向いた方向には、トゥルーフォームのオールマイトがいた。

「…グッ！」

オールマイト一瞬マツスルフオームになりサムズアップをすると、上鳴は三つの力を同時に発動する。

ギユアアアアアアアアアンンン!!

そんな音と共に全身から赤と金色の光をバチバチと言わせながらネクスアーマーを装着した上鳴。

ボールを浮遊させた後、右手をL字にし、左手を右手に翳す。すると右手に光が灯る。

その状態のままその場で2回転し、遠心力をつけて目の前にあるボールをアツパーカットの要領で吹っ飛ばす。

ぶつかった衝撃とその後に腕のアーマーからバシユン!と空気が放出され、更に勢いが増した衝撃、二回受けたボールははるか彼方へと飛んだ。

ピピツ!!

「……無限……か。」

まあそうなるだろうと、相澤はそう言うかのように結果を言う。

## 個性の Introduction

その後も、トリプルアーマーのままで残りの二種目をやった上鳴。「さて、結果を表示するが…一人だけおかしい奴がいたがそこは置いとく。一人一人発表するのも非合理的だから一気に表示するぞ。」

そう言うと、空中に投影される結果。一位には当然と言うべきなのか、上鳴が表示されている。続いて八百万だがその次が爆豪である。その次であった轟は、爆豪と上鳴を睨みつけるが二人はスルーする。

しかし、最下位に載っている峰田 実は口を開けて茫然としていた。当たり前だろう、やつとの事で雄英高校に入れたのにすぐに放り出されるのだから。あまりに酷い。

「あ、因みに除籍は嘘だ。」

『はい?』

突然の相澤からの言葉に困惑する生徒。

「最大限を引き出して限界値を知る為の合理的虚偽だよ。」

『はあああああああああ!?!』

ほとんどの生徒が叫ぶ中、推薦で入った八百万が

「あんなの嘘ですわ、少し考えればわかりますわよ?」

しかし上鳴は、

(違うな…最初から除籍する気が満々だった…酷かったら全員除籍する目だった…。)

と考え、八百万の考えを否定する。

こうして波乱を起こした個性把握テストは幕を落とした……

その後、放課後の教室にて…

「…どうしたんだよお前ら、そんな顔して。」

上鳴が戻るのを待っていたのか、轟以外の皆が上鳴を囲う。

「上鳴君!君の個性は一体何なんだ!?!」

「教えてよ！」

実技試験で一度見たとはいえ、それでも聞きたかったのか飯田と麗日や…

「パワーもそうだけど何なんだよあれ！」

「一体どんな個性なんですか?!？」

他の生徒にも質問される…。

「さっさと言った方がいいぞ上鳴い、かまってる暇はあるかもしれねえがよお。」

「…そうだな、とにかく教えるからみんな落ち着け。」

そう言われればと、全員が落ち着くと上鳴は話し出す。

「まず、俺の個性は【電撃】だ。」

「【電撃】？まあわかるには分かるけど赤い光とあのアーマーはなんなんだ？」

「待て待て、それも言うから落ち着け…えつと…」

「きりしま えいじろう切島 鋭児郎だ。よろしくな上鳴！」

元気に自分の名前を言う切島である。

「とにかく、俺の個性の【電撃】は身体に纏ったり手に集中させて剣とかにしたりも出来る。50m走とかでもやった一部に収束して身体能力上げたりも出来るぞ。」

「…俺のダークシャドウももしかしたら…」

「個性を鍛えれば…常闇だっけ？お前も出来るようになるだろ。」

「!!ホントか!？」

「ああホントだ。」

常闇の疑問に瞬時に答える上鳴。

「そうだ、俺と麗日さんは見たことあるが、赤い光と銀色のアーマーは結局何なんだ？」

改めて、飯田が質問すると、

「そうだな…まず赤い光はフルカウルっていうもう一つの強化形態だ。」

そう言いながら、フルカウルを発動させる。

「それで、銀色のアーマーについては簡単に言おう、あれはネクサスつ

ていう力だ。」

『ネクサス?!』

当たり前だが、誰も知らないのだから頭に?を浮かばず。

上鳴がフルカウルを解除して、皆に見えるようにエボルトラスターを顕現させる。

「この【エボルトラスター】を鞘から取り出して、掲げると銀色のアーマー、つまりネクサスアーマーが装着されるんだ。」

そう言いながらアーマーを装着する上鳴。

「で、この状態で電撃…もうめんどくさいからライジンでいいか…ライジンとフルカウルを発動させたのがあのトリプルアーマー、基【トリニティアーマー】だ。」

最後にそう説明しながらアーマーを解除する。

「でもすげえよな、其れを簡単に使いこなすなんて!」

「結構体に馴染ませるのに時間かかったけどな…一度は体がボドボドになるかと思ったし。」

そう言うと、耳郎と爆豪も頷く。どうやらその場面に直面したようだ。

「でもこれで、A組最強は上鳴君だね!」

「そうやね!だって試験でも活躍してたし!」

「ああ、あれは凄まじかった!」

飯田と麗日の言葉で雰囲気は温かくなる。

「……。」

そんな中、上鳴を見つめ続けていた轟を爆豪は見つける。

(あの目…憎悪か?あいつの親は…エンデヴァーだったか。)

ふとそう思い、轟に近づこうとするが、

「…帰る。」ガラガラ

「おい、待てや轟…行っちゃったか。」

引き止めようとしたが、直ぐに帰ってしまったからか、その場で少し立ちすくむ。

こうして、高校生活一日目は終わったのである…。

## 開始！戦闘訓練【前編】

高校生活が始まって2日目…

昼休み

「まあ普通に授業があるのは分かるが、プレゼントマイクの英語の授業は驚きだぞ…。」

「意外にもまともだったしね。」

「それは言わないお約束だ。」

「はーい。」

そう言いながら二人仲良くご飯を食べる。

ここは食堂、雄英高校生徒全員が集まり昼食を食べる場所である。因みにこのカップルの昼食はと言うと…

上鳴…和風ハンバーグ＋卵かけご飯＋あさりの味噌汁

響香…たらこスパゲッティ＋コーンポタージュ

「少食…っーか基本あんま食べねえのかお前ら」ガツガツガツガツ

「いや、君はその辛そうにしか見えない麻婆豆腐を軽く食べてるのか!?!」

「嘘だろ…ある神父でさえ汗をかきながら食べきる超激辛麻婆豆腐をヒイヒイ言わずに食べてるだど…!?!」

説明しよう、今爆豪が食べている麻婆豆腐は某英霊がドンパチするアニメに出てくる外道愉悦神父でさえ汗をかきながら食べる麻婆豆腐なのである。(V O 中田譲治)

昼休みが終わり、5時間目が始まる。

「わーたーしーがー!」

独特な声が廊下から聞こえると

「普通にドアから来たあああああ!!」

ドアがバンツ！と開き、ヒーロースーツを着たオールマイトが教室に入ってくる。

『オールマイトだあああああ!!!』

「すげー！マジで教師やってるんだ！」

「しかも銀時代のコスチュームだ！」

「画風が違いすぎて、ちよつと目が…。」

何か目に異常をきたしてる生徒もいるが、それは置いておこう。

クラスメート達からの憧れの眼差しを受けながら、教壇に立ったオールマイトは高らかに宣言する。

「この時間はヒーロー基礎学！その名の通り、ヒーローになる為の学習だ！」

「そして今日はこれ！戦闘訓練だ！」

その言葉に

「戦闘…。」

「訓練…！」

上鳴と爆豪が眩く中、

「それに伴ってこちら！」

その言葉によって、壁の一角が突き出て出席番号が振られている棚が現れる。

「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム！着替えたら順次グラウンドβに集まる様に！格好から入る事も大事だぜ、少年少女！自覚するんだ、今日から君達はヒーローだど！」

「おお…これ刀匠が鍛えたやつなのか。何かとんでもないの使ってるのかな…素材オリハルコン？」

「電気〜。」

電気が自分が持つてる刀にちよつと躊躇いを持った時、響香が声をかける。

響香のヒーロースーツは白いアンダースーツの上に、脚には個性強化の為かスピーカーが付いている。服は黒い上着を羽織っている。勿論耐熱性や防御性もバッチリである。

かくいう上鳴のコスチュームはと言えば

「…何かすごいメカメカしいね。パワードスーツ？これ。」

腕と脚には黒い装甲があり、外側には排気口が見える。手の甲と足の甲には白い石がはめられた装甲があり、ここで電圧を変える。

胴体は少し盛り上がり、胸部のパーツが展開するような形に見える。

そして背中にはマットブラックの鞆があり、既に刀身は上鳴が持っている。

視聴者に分かるように言えばメ○ルギアラ○ジ○グの雷○である。

「ん？ああうん、そうだぞ。というかこの刀凄いい気になる。なんだろう、電氣流せって言われたような…。」

試しに個性を用いて刀に流した瞬間、刀身が光り出す。

「わあ…何か綺麗。」

「まあ分かるけど…これあんま使わないようにしよう。何かヤバイ気がする。」

「同感。あとでオールライト先生に渡しておけばいいよ。」  
すると、

「お前ら、ここにいたのかって上鳴お前それなんだ？」

「あ、爆豪。」

(爆豪のコスチュームは原作通りです。)

「んだよちったあ変えろよ主。」

(こっちに話しかけんなアンチにすつぞ)

「勘弁してくれ最近ヴィラン化が多いんだよ畜生が！」

「……」ジーツ

「…うるさくて済まねえ。」

「いや別に、俺（私）も同じ感じするから」

「うんうん、良いじゃないか！全員カツコいいぜ！さあ始めようか、有精卵ども！戦闘訓練の時間だ！」



オールマイトが生徒のコスチュームを褒めながら、さつさと授業を始めようとする。

「先生ー!」

早速というのか、ロボットに見えるコスチュームの飯田が拳手する。

「ここは入試の演習場のようですが、今回も市街地での訓練をしましょうか?」

飯田がそう言うと、オールマイトは首を横に振り

「いいや、今回はその二歩先に踏み込むぞ。ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、合計で言うと出現率は屋内が多い。監禁、軟禁、裏商売。真の賢しいヴィランは闇に潜むんだ。君達にはこれからヴィラン組、ヒーロー組に分かれて二対二の戦闘訓練を行ってもらおう。」

「基礎訓練も無しに…?」

見るからに蛙に見えるコスチュームを着ている蛙吹が不安そうに  
呟くが

「その基礎を知るための訓練なのだよ。ただし、今回はぶつ壊せばOKなロボ相手ではないぞ。」

そう言い締めると、

「勝敗のシステムはどうなっているのでしょうか?」

「ぶつ飛ばしても良いんすか?」

「また相澤先生みたいな除籍とかは…」

「別れ方とはどのように決めるのでしょうか?」

「このマントやばくない?」

生徒達から次々と質問が飛んでくる。

「んんんんん聖徳太子iiiiiii!」

さりげなくカンペを出そうとしたが、以前会った出久に言われた

「あんたは先生としては初級だからカンペとかを見ないとダメだ。だが戦闘訓練ぐらいは即興で設定は出来るはずだ。」

この言葉を思い出して手を引っ込めた。

「うおっほん! 状況設定はヴィランがアジトのどこかに核兵器を隠していてヒーローはそれを処理しようとしている。ヒーローは制限時

間内にヴィランを捕まえるか、核兵器を回収するか、ヴィランはヒーローを捕まえるか時間一杯まで核兵器を守り切れば勝利となる。チームは、厳正なるくじで決める！」

今回行う訓練の設定を言い終えると

「そんな適当な！」

と飯田が少し不満そうに言うが

「落ち着け飯田。他の事務所とも連携も考えるんだからそこも考慮してるんだろ。」

「なるほど！確かにそうだ！失礼いたしました！」

「構わないよ！ではくじを引きたまえ！」

少年少女達くじ引き中

「くじの結果はこうだ！」

- A 上鳴電気・麗日お茶子
- B 障子目蔵・轟焦凍
- C 峰田実・八百万百
- D 爆豪勝己・飯田天哉
- E 芦戸三奈・青山優雅
- F 口田甲司・砂藤力道
- G 藤宮切刃・耳郎響香
- H 蛙吹梅雨・常闇踏影
- I 尾白猿夫・葉隠透
- J 瀬呂範太・切島鋭児郎

「ちよつと縁があるかもね！よろしく！」

「よろしくな。」

麗日が上鳴に声をかけると

「むく……」

「頼むから睨まないでくれ。」

響香が切刃を睨むという謎の構図が出来上がってしまった。

「では早速最初の対戦カードはこれだ！」

電子ボードに出てきたのは

「ヒーローチーム Aチーム v s ヴィランチーム Dチーム」だった。

「さっそく爆豪とか：運がいいのか悪いのか：。」

「だ、だだだ大丈夫かなあ：？」

「早速あいつか。おいメガn：飯田、上鳴は俺がやる。お前は核んとこで守ってろ。」

「あ、ああ：君昔から変な渾名つけてるのかい？今俺のことメガネつ  
て」

「言うな！：：中学ん時あ自尊心の塊だったんだよ：：」

「ああ：なるほど：：」シミジミ

皆さんに報告したいことがあります

・・・今回私が言うことは、この「僕のヒーローアカデミア Under Story」の更新の停止及び凍結するという事です。

理由は少ないですが、元々ヒロアカを見てなかったこと、PSO2やAPEXなどのゲームにハマっていたこと、ウルトラマンの扱いが雑ではないかという思い、これらも含めていくつかの思念が交錯しこのような結論に達しました。

この小説は他の投稿者ともコラボしていたので辞めるにも辞めるべきではないと思っていました。本人方々にはまだ確認はとっていませんがそこまで何かしらの思いは無いのではと思ってしまうこのような決断をしました。

何かを書いてみたいと思って始めたのにも関わらず既に処女作も消した自分です、このような馬鹿ですみませんでした。

どうか、私のことを嫌いにならないで下さい。まだネタはあります。必ずちゃんとした長編の小説を書きます。

それまで、どうかお待ちください。

←のタイトルは今後書くかもしれない小説のタイトル名です。

- ・ 仮面絶唱シンフォギアCG (クローズとゲイツ)
- ・ 六人の魔王とその仲間たちの旅録
- ・ Fate／Grand Order
- ・ High school DXD Guardian of humanity star online
- ・ ハイスクールDXD 可能性の持ちし一角獣と黒き鳥
- ・ High school DXD 21st Riders

